

ONE LOVE

通信

62号

2017年12月17日発行

2017年が終わろうとしている今、日本におります。今回は日本到着後にガテラがマラリアを発症し、病氣と闘っている間に私はあちこちを回り、スケジュールをこなすという状態でした。もうあんなつらい思いは懲り懲りと、ガテラ、今回はそんなことがないように、体調管理をしっかりやっています。念のためマラリアの治療薬も持ってきました。

今年もいろいろなことがありました。ワンラブを支え続けてくださっている皆さま、本当にありがとうございました。

皆さまの今年一年はいかがでしたか？そして2018年も良いお年を。



【ワンラブスタッフに物申す！】

2017年、私にとってはどうにもすっきりしない年でした。悪かったわけではないのです。でもずっと心がパツとしない一年でした。常にモヤモヤしていて、絞り出したい膿がいつまでも出ないという感じ。

義足作り自体は例年通り滞りなく進んでいます。さすがに97年の開所当時よりは、仕事の量は減りました。あの頃は虐殺後間もなかったの、日々足をなくした患者さんが押し寄せていましたから。今は患者さんが来ない日もあり、そんなときは道具や機械の手入れ、在庫のチェックなどをしながら過ごしています。しかし義肢装具士たちの士気が高まらない。つまりこういった手入れや掃除などの仕事を言わなければやらないということですね。

物を作る人は皆そうだと思うのですが、道具があって初めて仕事ができる。だから道具は大切なもの。そういう意識がなかなか育ちません。なくなればまた新しいのを買う

だろうという気持ちがあるのか、壊すのも早いです。もっとも日本で買える道具は、それなりの質をしているので壊れにくいということがあるかもしれませんが（ルワンダで買える道具は中国製が多いので壊れやすい）。それに「大切に使う」という気持ちが薄いのです。

そして掃除を積極的にしません。こちらでは大抵掃除は掃除担当の人がやります。義肢製作所は広いので、掃除をしてくれる女性もいます。でも私は日本で修業をしていた時、親方から道具を手入れすること、掃除をすることを当り前のように教わりました。そしてそれは仕事をするにあたり、精神的に必要なことだと思います。

でもこちらの人はなかなか掃除をしません。もしかしたら日本は子供の時から、学校で掃除をすることが当たり前だったから、仕事においても掃除をすることに抵抗がないのかもしれません。一度、ものすごく怒ったことがあります。事務をしていた女性が目の前にゴミが落ちていないに拾わない。それを注意すると、遠くにいる掃除婦をわざわざ

bibi真美のルワンダ・ブルンジ日記 第47日



呼んでゴミを拾わせた。それを見て「自分でやれ！」と怒鳴ったのですね。

それにしても腹が立ってしまうのは、こういうことなのです。目立つ傾向として、日本で研修を受けた義肢装具士たち。日本に行って勉強をしたから、俺は偉い！と勘違いする。自分の肩書が上がったと思うのですね。だからそんな道具の手入れや掃除など、自分がする必要はないと。

そういう態度が目立ってくると、私は怒鳴る。たかだか7か月日本に行って義足づくりを勉強したところで、偉くなれるわけではないのです。

一つの例。今まで自分たちで部品から手作りしていたものがあります。が、ありがたいことにその部品が完成品として手に入れることができるようになった。だから自分たちでいちいち部品を作る必要がない。そして次の時、同じような義足を作るときに、その完成部品が手に入らないということも当然ある。そしてそれが無いという状況に出くわすと、彼らは「ないから作れない」というのです。今までない状態でやってきたにもかかわらず、だ。



私、説教中。
図体のでっかいアシエールを説教する時は、見上げなくてはいけないので、余計疲れる。

そんな彼らの態度を目の当たりにすると「水は低い方に流れる」と思うってしまうのです。20年ここでやり続けていても、どうにも人材の育成ということについては、まだ半ばにもたどり着けていないように思います。

ワンラブを運営するにあたり一番頭を悩ますのは資金繰り、それに続いて人材育成・人間関係となります。資金繰りの悩みはこれからもついて回ることなので、自分のできることをやり続けるのみですが、人材育成と人間関係については、これ、もう難しくて…。

スタッフとはしょっちゅうやり合っています。イラっとしない日はありません。私は日本で生まれて、日本で育ちました。だから体に染みついているのは日本のものです。どんなに長くルワンダにいても、多分ルワンダの習慣がすべて体の中に入り込むということはないでしょう。そして私も自分にある日本的なものを捨てて、ルワンダの人と同化しようとは思いません。

だからぶつかるのでしょうか？私が彼らに日本的なもの押し付けてしまっているのでしょうか？そんなことを日々悩むのです。

住めば住むほど、彼らとの違いを感じるようになります。昔は受け入れられた彼らの（私にとってマイナスな）行いも、受け入れられなくなっています。これは私が頑固になったということ？それもあるだろうなあ。

思うに、だんだんと活動が定着し、守るものが増えたからかななどと考えるのであります。今よりは昔の方が巻き込んでいる人の数が少なかった。だから自分たちのことを

中心に考えても平気だった。でも今はスタッフも増え（義肢装具士はもちろん、掃除や警備の人たち、レストランの従業員などなど）、彼らの生活も守らなくちゃいけない。そしてワンラブという名前そのものも守らなくちゃいけない。肩にかかる重圧が増えたのも一つの原因でしょう。

そんなことを理由にスタッフを怒鳴ってよいとは思わないけど、それにしても日々私のオフィスに来ては、給料の前借をさせてくれ、とか、おじいちゃんの子のお嫁さんの従弟が亡くなったから明日は休ませてくれとか（遠すぎてどこまでが親戚なんだかわからなくなる）、酔っぱらって転んで前歯を折ってしまったけど治療費がない、何とかしてくれとか言われると、真剣に書類を作っていたりしても全く集中ができず、ついドカーンと爆発してしまうのでありますよ。



こんなふうにもじめに仕事をしていると、彼らは忍び寄ってくるのです。そして一回沸点に達すると、それを覚ますのが非常に難しいのです…。

そして2017年はやたらとそういうスタッフに対してぐったりすることが多かったのですね。

スタッフを怒鳴った後というのは非常に気分が悪い。自己嫌悪に陥るのです。私が譲るべきなのではないか、日本人である私が主張するべきではなかった、彼らの意見を尊重すべきだったなどと考え始め、さらに仕事が停滞するのです。月曜の朝に怒鳴った日にゃあ、もうその1週間ほどん底。なにをしてもスカッと行かないのですね。

私は頭の切り替えがとても下手です。一つのことを1年以上よくよく考えることもザラです。

でも唯一の救いは、怒鳴られたスタッフがめげないということです。めげないというよりは、頓着しなさ過ぎともいえるかもしれません。だってほんの30分前に、私が卓袱台をひっくり返す勢いで、その辺の窓ガラスも全部割りまくるくらいの勢いで（あくまでも例えです）怒鳴ったにもかかわらず、彼らはしばらくするとニコニコと笑顔を向けて、さらに「実は…」と給料の前借をお願いしに來たりするので。

ああ、これはもう私の負け。今の私に必要なのは、彼らと同じような毛の生えた心臓。それを持ち合わせない限りは、私はここでは生き延びることができません。

果たして彼らにとって私とは一体何なんだろう？立場上はボスとなっているけど、あんまりそんなふうには思っているようには感じられない。ただのうるさいおばさんと化しているのかもね。

もうすぐ2018年、多分頭の中の沸騰は続くと思われるんですが、どうせだったら沸騰しがいがあったように、一人でも多くのスタッフが、仕事に対する責任をもって働くようになり、私のところに個人的な問題を持ってこないように祈る次第です。

【外務大臣表彰、ルワンダで受け取りました。】

前号でワンラブの活動が外務大臣表彰を受けたことをお伝えしましたが、11月になって在ルワンダ日本大使公邸でその表彰式がありました。

当日、ワンラブのスタッフも一緒に出席です。みんな、一張羅に着替えています。ガテラの古くからの友人ニャガタレも招待しました。でも彼は電化製品修理の腕前を持ちながら、日々飲んだくれてろくに仕事をしていません。来ている服もいつもボロです。でもガテラは晴れの舞台を幼なじみに見てもらいたい。だからガテラは自分の着ていないスーツとネクタイをプレゼントしました。その甲斐あって今日の彼はいつになく清潔で男前です。

スタッフの中には足に障害を持っている人もいて、充分なゆとりをもって出発しました。でもそういうときに限ってガテラは「ガソリンを入れなくちゃ」とか言い出します。だったらさっさと屋間に入れておけばいいのに、これがアフリカ人ならではの時間間隔でしょうか？雨も降り出してしまいました。いつも夕刻になると渋滞する交差点があります。案の定、混み始めました。

しかし、これがまあ、まったく動かないのです。動かないったら動かない。そしていつもはいる交通整理のおまわりさんも雨のせいかな、姿が見えません。みんな勝手に割り込むわ（ルワンダ人はそういう傾向強いです…）、ロータリーのまんまん中で止まっている車があるわでどうしようもありません。

ジリジリと前に進み、何とかその交差点を左折し（この時点ですでに15分遅刻）、これでよし！と思ったものの、そこから先も動かない。動かないったら動かない。

そして対向車もほとんど来ない。むっ？これはただの渋

滞じゃないぞとその時やっと気がついた。しばらくしてやって来た対向車に様子を聞くと、ああ、でっかいトラックが道をふさいでいるとか…。

私、いつもより早めに出たから遅刻するとは全く予想せず、大使館の担当の方の電話番号を控えてきませんでした。頭の中で時計がカチコチ鳴っています。どうしよう、どうしよう。主賓なのに遅刻なんて様にならない。でも連絡取れない。お願い、そっちから「どうしました？」って電話してっ！など考え、苦肉の策として、そのレセプションに招待をした日本の方に電話をして、現状を伝えてもらいました（この時点で30分遅刻）。

しかし前も後ろも車だし、Uターンもできません。ひたすら待つ。私のイライラは最大で、ガテラにも八つ当たりをしてしまい、車内は陰鬱な雰囲気…。

結局1時間の遅刻…。でもお客さんは忍耐強く、飲み物も飲まずに待っててくれました。

大使とご挨拶を交わすのもそこそこに（ひたすら謝る）、会はスタートです。

大使から今回の賞についての説明と、私たちの活動についての説明が来賓の人たちにありました。本当にうれしかったのは、大使がとても細かく活動のことを説明してくれたこと。大使としての忙しい仕事がある中、こんなふうにきちんと調べた上で、話していただけるというのはありがたいことです。

そして表彰状を受け取りました。金屏風の前で！こんなにキラキラ光っているものの前で賞を受けとるなんて初めてのことです！そして大使。副賞としていただいたのは、箱根の切子細工の箱。茅ヶ崎生まれの私は、箱根は一番近い温泉です。でもこの切子細工のことは、知ってはいけ



ルワンダ事務所代表ガテラより

【女性と子供。】

ルワンダでは女性に対しレイプをすると終身刑が言い渡される。非常に重い罪である。

真美が俺に質問をした。「人によっては、女性の服装が大胆だからレイプされても仕方がないという意見があるが、どう思うか？」

俺はその意見に反対である。人はそれぞれ着たい服を着る権利がある。目の前にミニスカートの女性が歩いているから、誘っている、だから襲われても仕方がないというのは全く間違っている。そんなこと、レストランに行って、人が自分の食べたいものを注文しているから、横から手を伸ばして勝手に食べるのと一緒ではないか。

だが真美はちょっと違うようだ。もちろんレイプをする人間が悪い。しかし避けられるレイプもあるのではないかという意見だ。確かにルワンダでも街角に立っている、そういうことを生業としている女性は刺激的な格好をしている。つまり「誘う」ために。

女性は女性であるが故に出くわす危険もたくさんある。例えば望まぬ妊娠をするということもその一つだと思う。

ルワンダは基本的には堕胎は禁止だ。すべての命は宿った時から生まれる権利がある。だから例えばレイプをされて女性が妊娠したとしても、それは生むべき命だという考えだ。

以前真美が質問をした（よく質問をする奴だ）。「もし私がレイプされて妊娠したら、あなたはその子供を愛せるか？」

当たり前だ。命に変わりはない。そう答えたら真美は意外そうな顔をした。

ルワンダでは最近、堕胎を合法化せよという動きが上がっている。不合法な処置をして命を落とす女性も多いからだ。

俺は男なので、女性の気持ちはわからない。ただ命を葬ることはいけないのではないかと、そう考えてしまう。そしてルワンダではその考え方が一般的だと思う。

しかし女性からそのような声が上がっているということは、もしかしたら堕胎という手段も必要なのではないかと思うようになった。

但し、合法になったからと言って、安易に子供を中絶することは同意しない。自分たちの将来を考え、子供を産める準備ができていないのに、一時の快楽のため愛し合い、挙句の果てに子供ができておろしちゃいましたというのは罪だ。

女性諸君、そして男性もだ、女性の立場、それから子供の権利をもう一度考えて、体を重ねるようにしませんか？

ど手にしたことがありませんでした。そしたらまあ、これが何とも素晴らしい細工。からくり箱になっていて、それを開けるためには20工程ものからくりを経なくてははいけないのです。さて、ここにどんなお宝を隠そうかなと思うものの、ダイヤもサファイヤも持っていない私は隠すものがありません。今に見てろよ、いずれはここに金塊を隠しておくのだ(しかし小さい箱なので、箱ごと盗まれる)。



ありがたいものをいただきました。
当日はワンラブを辞め、
独立したセザール・パトリック・エマーブルも来てくれたよ。

それから私からのご挨拶。私、英語の専門学校に2年間通ったものの、未だに英語が上達せず、コンプレックスとなっています。だから極力英語は話したくない。英語を話す人が近づいてくると、さっと逃げるありさまなのですが、今回は逃げるわけにいきません。1週間も前から辞書を引引き原稿を用意しました。感謝の言葉とワンラブの生い立ち、ガテラと私の出会いからワンラブが始まったこと、湿地帯を開拓してワンラブブランドが出来上がったこと、パラリンピックに出たことなど、自慢できることを全部盛り合わせました。事前に何度も練習したけど、結局当日は原稿から目を離すことができず、紙を見っ放し…。ああ、ああいう場面で堂々と「英語で」話せるようになりたいなあ。

そしてメはルワンダの障害者代表の国会議員のスピーチ。ごめんなさい、私は自分のスピーチが終わったので、気がぼーっとなっていて、ほとんど内容覚えていません…。

それが終わってやっと乾杯です。皆さん、それぞれの飲み物を手にしています。おお、なんと、日本酒もあるではありませんか！ガテラはその昔日本でサケを飲み、へべれけに酔っぱらったことがあるものの、今日はサケで乾杯。

会場にはルワンダの人、そしてルワンダに住む日本の方も来てくれました。ルワンダで日本人とほとんど付き合いのない私は、ここぞとばかり話をしたかったのに、テレビのインタビューやらにつかまり、話ができません。

そして目の前には、日本風カレーやら、焼き鳥やら、生の魚がのっかっているお寿司やら、エビの天ぷらやら魅力的な食べ物がてんこ盛りになっているのに、そこにたどり着くことができません。

大使館の方が気を聞かせて、それら一通りをお皿に乗せ、持ってきてくれたのに、割り箸を割ることすらできません。そんな状態で、どうして話にインタビューに集中できますよう？目はひたすらお寿司を追っています。かくして私はその日のごちそうにありつくことができないまま、会場をあとにしたのでありました…。

帰る頃は大雨。大使館の方がわざわざ車まで傘をさして誘導してくれました。ありがとう。

と、遅刻という大きな失敗はありましたが、無事に式は終了。欲を言えば、もう少しルワンダの関係者が来てくれ

たらうれしかったけど(呼んだのに来てくれなかった)、この日その場でインタビューされたガテラの映像が生でテレビで放映されたそうです。帰りの車の中で、その映像を見た人が早速ガテラに電話をしてきました。そしてなんとびっくり。その映像はルワンダだけでなく、ケニアでも流れたらしいです。ケニアにいるガテラの友人も電話で「おめでとう」と伝えてくれました。

皆さま、こんなに大きな賞をいただくことができました。本当に今までご支援ありがとうございました。先のコラムのように、沸騰することもしばしばある私たちですが、皆さまのお力添えの元、ワンラブを続けることができました。

継続は力なり、この言葉をかみしめながら、これからも皆さまと一緒に歩んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。



紹介します！ワンラブのスタッフ

活動資金を作るために運営しているレストラン。そこで働くシャニアという女性をご紹介します。

彼女はまだ20歳。あれ？考えてみると、うちで働いているスタッフの中では最年少？

若いからと言って侮ってはいけません。彼女はレストランのバーカウンターの中で、飲み物の出し入れ、そして会計を引き受けています。

最初、彼女はウェイトレスの仕事をしていました。でも英語が得意でないので、外国人のお客さんに接客ができず、あまり多くを語る必要のないカウンターの中に移動させました。でも彼女、毎日のようにミスをしていました。売り上げが合わなかったり、飲み物の在庫が合わなかったり、単純な計算ミスや、売った時に内容をすぐに入力すれば避けられるような簡単なミスを毎日犯していました。だからここでもまた私は彼女を叱ってしまうのですね。



バーカウンターでウイスキーを注いでいるシャニア。
ちょっと鼻ぺちゃのかわいい女の子。
発展途上中。

そんなわけで実は彼女、過去に何度もクビになりました。でもその都度もう一度チャンスをくれと戻ってきました。

そんなことを何回か繰り返し、だんだんとミスが減ってきました。私の小言も減りました。

お金を扱う仕事において、一番大切なのは手癖が悪くないということです。過去、売り上げをちょろまかして抜いていくスタッフも複数いた中、彼女は決してそういうことをしません。まだ多少ミスはするものの、それについてはその都度注意をすれば、これから直っていくことでしょう。

そんなふうにして彼女が働き始めてから、もうそろそろ2年が経とうとしています。レストラン関係で人材の募集をかけると、たくさんの人がやってきます。でも履歴書を見てみると、長くその仕事を続けた人は少ないです。これはなぜか？私が思うに、みんな素行が悪くてクビになったのではないだろうか。3か月続けばいい方です。そんな中彼女が2年近く、クビにされながらも立ち上がり、今まで一緒に仕事をする事ができたのは少ないケースです。

そして話せなかった英語も、だんだんと話せるようになりました。カウンターに集まってくる外国人を相手に、きつとがんばって会話をしながら覚えたのでしょう。文法の間違いはあるけど、そんなことどうでもいいです。そのうち、英語コンプレックスを持っている私よりスムーズに話せるようになることは間違いありません。

そんな努力をしている彼女に私からエールを。がんばれ、シャニア！

【相手を揶揄する。】

ルワンダ人はどうも自分たちがとても洗練された人種であるという意識が強いように感じる。確かに一部の人はものすごくスマートで、おしゃれで、身のこなしもエレガントな人もいます。が、その他大勢もたくさんいるのだ。

そのルワンダ人、コンゴの人たちを茶化することが大好きである。もしかしたらこれは今風に言うと、ヘイトスピーチにもつながることかもしれないのだが、その茶化す内容が面白いので、私はつい笑ってしまう。

例えば。

コンゴ人は食べられるものは何でも食べる。ゲテモノだろうと、なんだろうと食べる。いつも腹っぺらしだ。そのコンゴ人、ウガリ（トウモロコシやキャッサバ芋の粉を練った主食）さえあればおかずがなくても怖いものなしだ。街角で肉を焼いているところに行って、その匂いを嗅ぎながらウガリを食すのである。クンクン、あ〜、いい匂い。そしてウガリパクパクという状態ですね。これは日本の鰻の匂いでご飯を食べる話と全く同じである。

あるいは。

コンゴ人はおしゃれなことで有名である。しかもそのおしゃれ度が極端。おしゃれのためなら命も惜しくないというくらいの勢いだ。だからズボンはピチッとアイロンをかけるし、靴下にだってアイロンをかけちゃう。

そのコンゴ人、素敵な靴を見つけた。いや〜、おしゃれだな、この靴。俺が履いたら、女の子が寄ってたかって大変だな、などと勝手に想像する。が、残念ながらその靴は彼の足には小さすぎた。そこで彼らがその靴のためにやっってしまうこと。それは自分の足の指を切って、靴のサイズに足を合わせてしまうという行動なのだ。

と、そんなことをルワンダ人はコンゴ人を揶揄するために大笑いしながら話すのですね。

そしてルワンダ人が茶化す対象は主にコンゴ人なのだ。ケニア人でもウガンダ人でもない。なぜコンゴ人？と思うが彼らなりの理由があるのであろう。

このコンゴ人のエピソード、掘り下げればいくらでも出てきそうである。ヘイトスピーチは本当に聞くに堪えないが、こんな話ならそんなに悪くないと思う私なのである。

【病は気から】

昔に比べてルワンダの医療は充実してきた。が、それでも不安材料はたくさんある。知り合いが癌を患っている。残念ながらもう手の施しようがないらしい。お医者さんはその患者さんに言った。「もう検査をしても、何をしても意味がないから病院に来ないで良い」と。

本人にそう言ってしまうのだ。それを聞いて憤慨する私。それを受け止められる心の強さがある人であれば、それも良からう。が、そうでないのであれば、患者を勇気づけるのが医者の役目ではないか？

田舎の人たちは今の医療機器を良く知らない。CT スキャンというものがあるが、話には聞いたことはあるが実物を知らない。ある家族が病に苦しむ患者を何とかして治したい。でも病院にかかるお金がないというときに取った行動。

そのおばあちゃんを連れてきて、ビルに備え付けてあるエレベーターに乗せた。「おばあちゃん、おとなしくこれに乗っていてね。これはおばあちゃんの病気の痛みを取るための機械なの。途中で人が中に入ってきて、それは病院の人で、おばあちゃんの様子を見るために中に入るだけだから心配しないで。」そしておばあちゃんはエレベーターに乗り、1階から5階へ移動、そしてまた1階に戻ってきた。そしておばあちゃん「ああ、体がスーッと上に持ち上がって、なんだか変な気分だったけど、降りてみてスッキリしたよ。こんなにすぐに効くなんてすごい機械だねえ。」

そう、病は気からという部分がたくさんあるのです。

実際ガテラのおばちゃんたちは、私たちが日本から持ってくる龍角散が楽しみでならない（昔からある粉のオーソドックスなやつ）。どんなに苦しい咳をしていても、あれを飲めば一発で治るのである。

腰が痛くてうんうん唸っていても、日本の病院で山とくれる湿布薬を貼っただけで、嘘のように痛みがなくなるのだ。そしてそれを持っていく私は「良い嫁」として扱われるのである。

だからお医者さんが患者さんに発する一言、とても大事だと思うのです。

ルワンダは先進国の仲間入りをしようと、ものすごく高価な機材を整えたり、病院のシステムを変えようとしているけれど、まず大切なのはお医者さんが患者さんの気持ちを理解し、それに見合った発言をすることだと思いませんか？

そしてそういう機械に頼りすぎず、患者さんの顔を見て話すこと、そして患者さんに触れることなのではないかと思ったのでありました。でもこれって、ルワンダに限らず、日本も一緒かも。まず手を当ててほしい。2時間待って5分の治療ではなく。現実的には難しいのかなあ。



雑文もろもろ

雨が降ると大量に発生するものがある。

羽蟻である。雨の降りしきる中、じわじわと飛び始め、街灯などに集まってくる。家の中の灯りにもどこか入り口を見つけ入り込んでくる。飛び疲れ、地上に降りてくると、羽が落ち、その辺をざわざわと歩き回っている。あたり一面羽だらけだ。

人によってはそれを食べる。私がそれを始めて見たのはケニア。森の中で羽蟻が飛び立ち、子供たちが拾って、羽をもいで、パクッと食べちゃう。結構衝撃だった。

油で炒めてご飯やウガリと一緒に食べるとおいしいらしい。日本人の中には醤油で炒める人もいるそうだ。

それからバッタ。日本で言うところのイナゴだと思う。これも突然発生して、飛び交い、次の日の市場で売られたりしている。これも羽蟻同様食べるのだ。きれいな緑色をしたそのバッタは、一山いくらという感じで売られている。

私もここにいるのだから食べなくてはダメだ、これは彼らの食文化なのだと思います、挑戦しようとするものの、幼いころにデパートの地下で売られていたイナゴの佃煮を試食して、その足が口の中のぼっぺたのところに突き刺さった感触を思い出し、未だに試せていない。

ガテラに、あのバッタを買って料理しようかと聞いてみた。きつとふるさとの味に違いないと思ったからだ。が、曰く「あんなものを食べるのはコンゴ人とルワンダの田舎者だけだ」と。ここでもコンゴ人はそういうくくりに入ってしまうのである。そしてどうやらルワンダ人もあれはそれほど食べたい食材というわけではないようだ。

ルワンダに来る日本人で、滞在中わざわざ日本食レストランや中華料理を食べに行く人も多い。私はどうもそれが理解できない。せっかく外国に足を運んだのだから、その国の料理を楽しんでみようよ。長期滞在でそれらがめっちゃ恋しいというのなら許す。でも短い期間で、もう少しすればラーメンだろうが餃子だろうが食べられるのであれば、もう二度と食べられないかもしれないその国の料理を楽しんだ方が面白そう。多少お腹を壊したって、それも思い出になるのではないかしら？だったら私も羽蟻とバッタを食べる？その通りです…。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆さまのご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信61号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（8～11月）。

8月	円
9月	円
10月	円
11月	円

このおかげで次の製品を配布することができました。

義足	15本
装具	3本
杖	28本

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【ただ今、帰国中！】

前回と同じころの帰国となりました。本当は秋に戻りたいのです（私の好きな季節だから）。でもその頃って、なかなかルワンダの仕事の段取りが組めず、行けないのです。

前回の帰国はしんどかったです。ガテラのマラリアがあったから。活動の話をする予定を入れてしまったので、看病に専念することでもできず、ガテラを一人家において出かける。家には固定電話はない。私が携帯電話を持っているだけ。だから万一ガテラの病状が悪化して、助けてくれ～というときも、私に連絡を取ることができず、家に帰ったら息絶えていたということもあり得ると思いながら、あちこちで話をしていたので、気もそぞろだった。

何もそんな思いをしてまで設備の節約をしなくてもいいのではないかとやっと思ひ、帰国中にスマホを買おうかと思っています。今まで頑なにスマホを拒んでいただけ、緊急！となることもあり得ると思ひ、少なくともこれを書いている今は買おうかと思っています（日本に着いてから買うのをやめるかもしれないと思ひたりするので、この表現）。

今回、実は予定の入り方が悪いです。2月という月のせいか、なかなか話をさせてもらえる場所を見つけるのが難しいです。通信を読んだ皆さま、もしも1月下旬から2月にかけて、私たちを呼んで話を聞いてみようというところがありましたら、ご連絡ください。時間の許す限り、動きたいと思ひます。

日本での予定はホームページやブログに載せますので、それをご覧になってください。そして話を聞きに来てください。

今回は前号でお知らせしたガテラの甥っ子の書いた本やルワンダの小物、ワンラブグッズなどを併せて販売する予定です。

また今回は何回かルワンダのお料理教室も開こうかと思っています。現在考えているのは、ルワンダの食材を使った正しいルワンダ料理。日本で手に入る材料を使ったルワンダ料理も、主婦の皆さまには良いかな？と思ひたけど、ルワンダの食材を中心に使ったお料理教室にしたいと思ひます。さて、どの料理を作ってみようか。紹介したい料理はいっぱいありますのよ。

どうぞご関心のある方、いらしてくださいね。

お待ちしております！

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町 12-28-304 TEL: 080-6564-4448

info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.rw(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信62号 2017年12月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project